

坪井俊映著

『法然浄土教の研究』

光 地 英 学

仏教大学教授・文学博士、坪井俊映先生はこの度、「法然浄土教の研究」―伝統と自証―についてという大著を上梓せられた。さきに「浄土三部経概説」「法然上人の教え」「浄土教汎論」等の名著に次ぐ力作である。今度の高著は、前著に優ること遙かであるといつても過言ではない。そのことは学位論文の再訂出版であることから窺い得る。先ず以てその労苦に犒いの辞と、衷心よりの敬意と、甚深なる祝意を拝呈したい。

緒論の他、三編より成り、更に附録と英文要旨が添えられてある。七九五頁（英文共）にも及ぶ膨大なものである。副題でもあり、また本論攻の著述改図でもある伝統と自証のうちの伝統は、善導（観経疏）、道綽に始まると見られる数量念仏、信行の三階教などを以て代表とされる末法思想、それに日本浄土

教の先駆者源信（往生要集）が中心となっている。かかる法然上人の先駆思想に立った法然浄土教の自証は、自証の浄土教、半金色善導、選択本願念仏、念仏と余行、自証の信、凡夫、還愚痴の凡夫、信受する阿弥陀仏の八章から構成されている。次に遂次の内容紹介を割愛し、特に注目したい点のうちの苦干を略記するに止めたい。

第一編の最初に、法然の真筆を含めた研究的なものとして看過すべからざる重要問題である。同編第一章の善導釈書の流伝について、比叡山で行われた「西方懺悔法」の淵源するところを、善導の「往生礼讚」と「観念法門」等に探っているのは、同章第七節の南都北嶺の善導観とともに、極めて興味深いことである。同篇第四章の法然の往生要集観

は、法然の一群の「往生要集」釈書についての諸学者の見解と法然諸伝を踏まえてのもので、その綿密な考証は、実に先学未談といふべく、本著述の白眉の一として光彩を放つものである。第二編に移り、第二章法然の自証と半金色善導中に、十四種の伝記および、著作における善導来現説を挙げ、夢定中の師資面授相承ともいふべき神秘性を肯認しての記述である。法然上人が、源信の「往生要集」を指南とし、善導の「観経疏」に依って、念仏門に帰入したことから、筆者が、「要集」から善導へと究明せられていることは当然のことながら、特に善導の「半金色身」に注目したのは極めて滋味深いこととされねばならない。

第二編念仏と余行の問題中、念仏と戒、念仏と菩提心は、等閑に付すべからざる肝要事である。前者は広く念仏と倫理性の問題を中心とし、浄土教の倫理思想にも関係することであり、後者は筆者の指摘の如く高弁の「摧邪輪」の難詰したのにも見ても諒とされる程、攻究を重ねねばならない事項と思慮する。同編第五章第五節は信と行の関係である。この問題は法然仏教の中樞を為すところのものである。ここで著者は、「法然は善導の三心釈

を全面的に受け入れるばかりでなく、三心具足の形態、三心相互の関係等について、法然独自の見解を述べていられるが、しかし三心の内容に関する思弁的な釈義は見出すことはできない」(四四〇頁)とされている。が、

同所に「一声の称名でも必ず往生できる念仏であるからと信じて、念仏を相続するならば、それはそのまま往生の業となる」とあるこの記述は、蓋し至極の明断であるといわねばならない。これに連関して第七節の難信易行についてにおいて、「念仏はだれでも修することのできる易行であるが、念仏行の基盤なる信心が弱く、真実の信心がなかなか得がたい処より、浄土念仏の教えは難信易行ということが出来る。」(四五一頁)と結んである。いう如くまことに難信易行である。更にいうならば、念仏も易行であるが難行でもある、といい得られないであろうか、といい度い。一声二声の念仏の程度ならば易行であるが、不断念仏、つまり念仏の相続に関しては易行ではなくして難行である。蓋しこのことはお互いの日常性において味得できることでもあろうからである。同編第八章、信受する阿弘陀仏については、信行に比較して、割合、法然の資料が少いけれども、救済者が弥

陀であるから、等閑視されるべきでない。この点、特に論述の努力が払われていることは意義深い。たゞ欲をいえば、弥陀のまします、そして衆生往生の土である浄土についての説論の一項目があるならば、という希望すら懐きたい程でもある。

第三編は、法然浄土教に対する批判の史的考察で、はじめに著者が指摘している如く、その批判の歴史は長い。即ち法然の専修念仏に対する論難攻撃は、上人在世中から、入滅直後、更に近世にまでも及んでいる。当該事に関し、著者は南都北嶺、禪宗、日蓮宗からの抗難の記述から、更に浄土宗と真宗との論争にも及んでいる。思うに法然教学を取扱ったもので、この種の如く整備した態で、法然仏教批判を特に一綱目として著書にものしたのは、前代未聞のように思われる。従ってまた、これは当高著に光彩を添えるものといわねばならない。

なお最後部に法然の語録、伝記類の積述、評述が附録されていて、頗る後学に便を与えている。著者のあとがきに依れば、当著書掲載のものは、従来、各種の研究誌に発表した論文に、未発表のものを加え、全体的組織づけの為に書き改める配慮と努力をなした由。

そして著者は論旨の重複や不徹底、法然上人の真精神の曲解等の省慮を波瀾されているが、それは著者の奥ゆかしい人柄を示すもので、本書において法然教学の重要問題が見事に提示論究されているとされねばならない。のみならず英文要旨までも付せられているという配慮も看過されるべきではない。

曾て高名な宮本正尊博士が、筆者(光地)に、自己の代表ともいべき著書は、生涯にただ一冊にてよいと申されたように記憶している。その意味からして、著者坪井先生の今度の撰述は、同教授のライフ・ワークであるといっても敢えて失当ではないように思われるが、如何であろうか。

次に著者と法然上人とを一考してみたい。周知の如く法然の生誕について母が刺を呑んだと夢みて、上人を懇妊したと伝えられている。当時叡岳幾千の学徒中、智慧第一の称を恣にしたその刺にも似た頭脳の切れを、包むに徳を以てしたのが、他ならぬ円光大師法然その人であった。その法孫に相応しいのが、坪井先生である。というのは秀逸な学を抱擁するに、温厚篤実な徳を以てしているからでもある。まことに浄土宗、そして仏教大学に、この人ありの感を深からしめることであ

る。殊に本著中、法然の三昧発得や夢定相承等を肯認随善されていることは、学者であるとともに、宗教書である面目を鮮活ならしめていることでもあって、敬讀の念一入なものがある。

筆者は従来、坪井先生から浄土学の示唆を得ることが一再ならずあったことを、感謝の念に充ちて当禿筆を走らせるものである。今回当著を精読する暇のないまま、粗読程度で

竹内道雄著

## 『永平孤雲懷辨禪師伝』

鏡 島 元 隆

書評といふことは、烏滸の至りでもあり、礼を失することの憶いも浅くない。従つてまたこれは書評ではなくして、紹介という意味からのものである。否、当一大著述に対する限りなき讃嘆の内意からの拙文に他ならないことを特に強調したい。

(隆文館、昭和五十七年二月発行、A5判、七四五頁、九五〇〇円)

本書は、去る一昨年七百回大遠忌を迎えた

永平寺第二代孤雲懷辨禪師の伝記である。宗門における懷辨禪師の伝記としてまとまったものは、五十年前の六百五十年大遠忌を記念して著わされた村上素道氏の『永平孤雲懷辨禪師』と大久保道舟博士の『永平孤雲懷辨禪師御伝記』とが存するが、両書とも今日では容易に入手できない書であるから、本書は懷

辨禪師伝記として好箇の入門書と言えよう。

著者竹内氏は、人も知る名著『道元』(吉川弘文館)の著者として、宗史界における第一人者であるから、まず執筆者にその人を得たことを喜びたい。

著者竹内氏は、本書執筆に当って、「学術的研究を基礎にしつつ、一般読者にも平易に親しめるもの」という姿勢を貫くことにでき

るだけ留意した」と述べている。この氏の意図は美事に果たされたものと言えよう。というのは、氏は本書の伝述に当って永平寺本山の宝庫に入つて懷辨禪師について探索し得るかぎりの資料を検討吟味しているからであつて、そのことは本書の「附論」に付せられた「孤雲懷辨禪師の伝記史料について」をみれば、一見明白である。この生の伝記資料に立つて、本書は昭和五十年五月から五十六年一月まで、永平寺の機関誌『傘松』誌上に連載されたものを総括し、補訂したものであるから、一般読者にとつて親しみ易く、読み易いものであることはいふまでもない。

氏は、本書伝述を通して著者によつて新たに発見されたこととして、つぎの七点を挙げている。

第一は、懷辨禪師の生涯の重要な思想的課題の一つを、罪業意識の克服とみたことである。この罪業意識は、著者によれば懷辨禪師の臨終間際まで続いたのであつて、このことに氏は道元禅あるいは日本曹洞禅の展開史の上において重要な意味をみるのである。

第二は、その俗系について大胆な類推を行ない、父を藤原伊輔、母を平景清に縁りのある女性と断定していることである。これによ